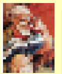
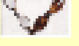
めがねの起源

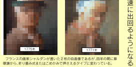


眼鏡は十三世紀の北イタリアで生まれたと言うのが定説である。その背景には、ベネチアでガラスの製造技術が発達したため、この地方でのみ無色透明なガラスを製造出来たことがその理由として挙げられます。一二八九年にサンドロ・ティ・ポポゾが書いた「家庭経営論」には、当時眼鏡が発明されて間もないことが記されており、また、他の幾つかの文献からも、十四世紀以前にすでに発明されていたことが明らかである。だが、本当に基本的な道具の多くがそうであるように、いつ誰が発明したものであるかという正確な記録は、残念ながら残されていない。

最初の両眼用レンズを使った眼鏡は、レンズを入れた鉄の輪から出した柄を鋲で留め合わせるリベット（鋲打ち）眼鏡であった。眼鏡が描かれた最古の絵と言われる壁画にあるのが、まさにこのタイプである。当初は鋲の部分を手で持っていたが、すぐに鼻に載せる鼻眼鏡が考案され、やがて両眼部分とブリッジが一体となったフレームが登場。さらに時代が下るとともに、ハサミを開いたときのように眼鏡を作り、柄を鼻の下で持つハサミ眼鏡や、リベット眼鏡の鋲の部分が固定式ではなく鼻幅に合わせて調節できるようにしたヒンジ眼鏡など、さまざまな工夫が凝らされていく。



ごく初期の眼鏡は知識階級のものであり、後には経済的余裕がある人が持つステータスシンボルとなった。だが、十七世紀に入り、兼価な眼鏡が急速に出回るようになると、上流階級の人々は高価な素材や装飾を競うようになり、デザインの多様化を伴いながら製品の二極化が進んでいった。眼鏡が現在のような形になるのは、一七三〇年頃、英国の眼鏡商エドワード・スカーレットがつる付き眼鏡を開発してからである。



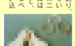
1775年
1771年

フランスの画家シャルダンが書いた２枚の自画像であるが、四年の間に鼻眼鏡から、折り畳み式またはこめかみで押さえるタイプに変わっている。

日本への伝来

日本に現存する最古の眼鏡と考えられているものは、京都大徳寺大仙院所蔵の象牙製のヒンジ眼鏡である。寺伝によると、室町幕府八代将軍足利義政（一四三六～九〇年）使用のものを十二代将軍義晴（一五一一～五〇年）が同院開祖の古岳禅師に与えたと言うことになっているが、他に一切の資料がなく、詳しい経路をたどることができないのが惜しまれる。したがって、文献的に日本渡来の年をはっきりと特定できるのは、宣教師フランシスコ・ザビエルから大内義隆に献上された一五五一年ということになるだろう。布教のための保護を目的として、鉄砲や鏡などとともに贈られたヨーロッパ文化の一つであった。イエズス会の宣教師フランシスコ・ザビエルは一五五一年、大内義隆に眼鏡を贈った。「大内義隆記」には「老眼ノアザヤカニミユル鏡」と記されている。

大名達に喜ばれ、珍重された眼鏡も、一般の民衆にとってはまったく無縁のものだった。宣教師ルイス・フロイスが書いた「日本史」の中には、一五七四年に織田信長に会いにいくフランシスコ・ガブラルが眼鏡をかけており、それを目撃した一般庶民の驚きが生き生きと描かれている。「人々は、バテレンには眼が四つあり、二つは皆が本来持っている普通の位置に、他の二つはそれから少し外れたところにあって、鏡のように輝き、恐るべき見ものであると思い込んだ…」



足利義政が使用していたとされるヒンジ眼鏡。中央の鋲を中心に動かすことができる。日本

だが江戸時代を通じて中国やヨーロッパから眼鏡が輸入され国内でも生産されるようになると、日常生活の中に徐々に浸透していく。当時の職人の姿を描いた職人絵の中には、蒔絵師、仏師、版木師など細かい手作業を必要とする職種で眼鏡が登場するし、喜多川歌麿の浮世絵シリーズがあって、いずれにも同じ紐付き鼻当て式の眼鏡が描かれている。もはや庶民にとっても、眼鏡はさほど珍しいものではなくなっていたということだろう。

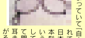
江戸時代にもサングラスがあった。これは、江戸時代末期に作られた折

最後に、眼鏡の歴史に寄与した日本人の貢献について触れておこう。あるドイツの学者によれば、眼鏡に鼻当てを付けることを考え出したのは日本人であるという。十六世紀後半から十七世紀にかけて、フレームに通した細紐を耳に結び付ける形態のものが現れたが、日本人の場合、鼻が低いのでレンズにまつ毛が接触してしまう。そこでブリッジに支えを作ることによって、高さを出すように工夫したのではないかというのである。これは一つの説にすぎないが、今でも輸入物の眼鏡をかける時に経験することであり、理論的に納得のいくものである。鼻が低いことも、眼鏡の発達には役立ったということだろうか。

国産の水牛の角で作られた眼鏡は元禄時代のもの。紐で留めるタイプになっている。

めがねの進化

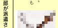
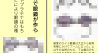
枠に入れたレンズにすぎなかった眼鏡が、つるが付いて耳にかけるようになるまで、実に四世紀半という時間を要している。もちろんその間に、眼鏡を支えるためのさまざまなアイディアが出され、それに伴って形もまた変化していった。一つは手で持つという、非常にシンプルな方法である。この系統は後にハサミ眼鏡になり、やがてローネット（柄付き手持ち眼鏡）となって、公の場所では眼鏡の使用は避けるべきであるという上流社会では、十九世紀になってからも使用されていた。もう一つは鼻に載せるというやり方で、やげて鼻幅に合わせて調節できるヒンジ眼鏡ができ、ついにはバネを入れて鼻を挟む鼻眼鏡となった。



見た目はいいものの、鼻眼鏡はさすがに息苦しかったらしく、格好は悪いが紐を付けて耳で結ぶタイプは十六世紀後半に誕生して以来、ずっと用いられてきた。そしてこのスタイルの延長に、つる付き眼鏡があるのである。だが、最初はつるの部分はこめかみのところで止まっていて「自由に呼吸できる眼鏡」と宣伝されていたという。このスタイルは日本では、明治時代になっても日本髪の女性に髪型が乱れないという理由と、また「頭痛押え型」として長く愛好されていた。そうして間もなく、つるはこめかみから耳まで伸び、今日の原形ができあがるのである。

めがねの歴史

眼鏡の年表

年	
1289	**イタリアで眼鏡誕生?** イタリアの書物に眼鏡についての記述が発見されたことから、この時代に眼鏡があったことが証明された。
1488	**ドイツでグーデンベルグが新印刷術を発明。** 新印刷術が発明されたことにより聖書などの書物世に広まるとともに、高級品とされていた眼鏡も生活必需品として徐々に広まっていった。
1551	**フランシスコ・ザビエル、大内義隆に眼鏡を贈る。** 日本に初めて眼鏡を伝えたという説もあるフランシスコ・ザビエルは国内の眼鏡史に必ず記述されている。 【写真右】眼鏡を持ったザビエルの像 【写真左】名古屋／熱田神宮に建てられた「眼鏡の碑」縄文時代の遮光器土偶を復元したもの。古代人は眼鏡を知っていたのでしょうか。
1574	**織田信長時代、バテレンの一人が眼鏡を掛け、民衆を驚かす。** フランシスコ・ガブラルの一行が眼鏡を掛けていた。その様子を見た人々は「バテレンには目が四つある」と驚いたという。
1600	**徳川家康、支柱式天狗眼鏡を愛用。** 舶来品への好奇心を持ち、鉛筆や眼鏡などを使用、それらの愛用品を後世に残している。
1615	**浜田弥兵衛が南蛮より眼鏡を日本に持ち帰る。** 朱印船の船長浜田弥兵衛が眼鏡の製法を南蛮より学び、それを生島藤七に伝えた。
1836	**欧州にてヴィクトリア朝の幕開け。** 欧州の貴族達がロールネック型の眼鏡を使用。きらびやかなデザインに装飾品としての価値も感じる。 
1873	**ウィーン万博開催。日本から朝倉松五郎が派遣される。** ウィーンで開催された万国博覧会に朝倉松五郎が参加、「拓殖興業」の一環を目的とした渡欧だった。
19世紀後半	**アメリカにてウィーン氏が新デザインを考案、「ウィーンタイプ」と呼ばれる。** アメリカにてウィーン氏が眼鏡のデザインを考案、「ウィーンタイプ」と呼ばれるようになる。ウィーンで誕生したものと思われがちだが、実は違うようだ。
1923	**モボ・モガたちの間でロイド眼鏡の第一次ブーム。** 喜劇役者ハロルド・ロイド氏が愛用したことにより「ロイド眼鏡」と呼ばれるようになったというが、定かではない。日本でも人気を博す。  国産のロイド眼鏡は大正から昭和初期にかけてブームになった。上はその当時のもの、下は最近のものであるが昔ながらの風合いを持っている。
1930	**ゴールドとプラチナの素材で眼鏡が作られる。** 素材の発展が著しく、ゴールドやプラチナはもちろん、アセテートの品質改良などにより眼鏡の種類が増える。
1950	**マリリン・モンローのかけていた眼鏡が大人気、「モンロー型」と呼ばれる。** マリリン・モンローが丸顔を隠すために愛用していたといわれる両サイドが吊り上がった眼鏡に注目が [illegible]に大人気のモンロー型眼鏡。
1964	**太陽族にセルのサングラスが人気となる。トンボ眼鏡もほぼ同時期に大人気。** 「太陽の季節」（石原慎太郎著）に登場する太陽族が太いフレームをこぞってかけるようになる。同時期、トンボ眼鏡も人気となった。
1965	**セルウェリントンがブームとなる。** 上の太陽族、セル素材のデザインにウェリントンタイプを愛用。四角形に少し丸みを帯びたデザインが目立っていた。
1969	**メタル素材が注目される。** セル素材台頭の影で静かに人気を集めていたメタル素材が注目を集め始める。
1974	**サラリーマンの間でブロウラインが人気となる。若者の間ではレイバンが。** サラリーマンの間でメタルフレームとセル素材を使ったブロウタイプが人気となる一方、若者がこぞってレイバンを買い求めた。
1983	**ボストン型、ティアドロップ型の人気が高まる。** ウェリントン型によく似ているが、リムが逆おむすび型をしているボストン型はアイビーファッションとともに大ブレークした。